

## 江戸時代の「炭」と「大井」の里山物語り

大井里山保全協議会

今、取り組んでいる「竹炭」は里山保全という観点から開始した。これは、「炭素の固定化」という「地球環境保全」の取組でもある。地下資源は言うまでもなく、将来の子ども達にも残す共通資源であり再生可能な資源でもある「竹」「樹木」を「炭」とすることで、活用の選択肢が「土壌改良剤」「水質改善剤」等で微生物と共生する資源に生まれ変わるのである。

丸山川の清流に棲息する「翡翠」は自主防災のシンボルです。河川岸の竹の整備は里山の課題でもあり、無煙炭器の運用が鍵です。



大井地区の「炭」の歴史をたどると、みねおか牧との深い関係が浮かび上がってきます。以下は青木更吉氏の「嶺岡牧を歩く」からの抜粋です。炭焼きが「共生」の大きな役割を示しています。

牧と炭との関係はないように思えるが、炭焼きの入用金は幕府の野馬方役所から出ている。これは報奨金・前借り金の意味で、牧の林を伐採・炭にして江戸に送ることで嶺岡牧の増収を図る目的であった。同時に牧の日当たりが良くなり、茂った野草、切株の新芽を牛馬が好んで食べた。間伐された林は夏の暑さ・冬の寒さを防ぐ憩いの場所となった。1800年頃から始まったと推察される。大井でも牧士の遠藤宇作氏が中心となり、平塚・山田・荒川等と盛んに炭が焼かれた。炭1俵で焼夫賃6分3厘1毛、俵代1分2厘、縄代2厘、山出し・津出し（運送費）4分5厘5毛がこの頃の相場。大井からは、当時の柳原木戸（西谷）長尾木戸（茂沢）から馬又は背負いで集積場の平久里の天神宮（天神社）に運ばれ、富山の高崎浦から船で江戸の深川・林町の炭問屋絹川屋に運ばれたのです。



大井里山の「矜矜大作戦」には偉大なる大先輩がいたのです。